

つける。自分にかつことができれば、そこにしぜん柔道の道が開かれてくるものなのだ。」

四郎はびつくりしました。嘉納のいう「自分にかつ」ということは、四郎がおじいさんと約束したことはだったのです。

「柔道は、ただ相手をたおすだけの、手先の技術てさきではない。術ではなく人間の生きる道である講道館の柔道は、柔道を通して自分にかつための強い心を育てていくのだ。つめたいとか、つらいとかいう自分の弱い心を、自分でさえることができなければ、人間はいつも弱いままで終わってしまうのだ。

それが、自分にかつ、ということさ。どうだ、四郎。強くなりたいか。」

「はい、先生。手もやっぱり、つめたいけど、でも、おれは強くなりたいと思います。」

「アハハハ。つめたければ、つめたくてもいいんだ。だが、それをこらえて